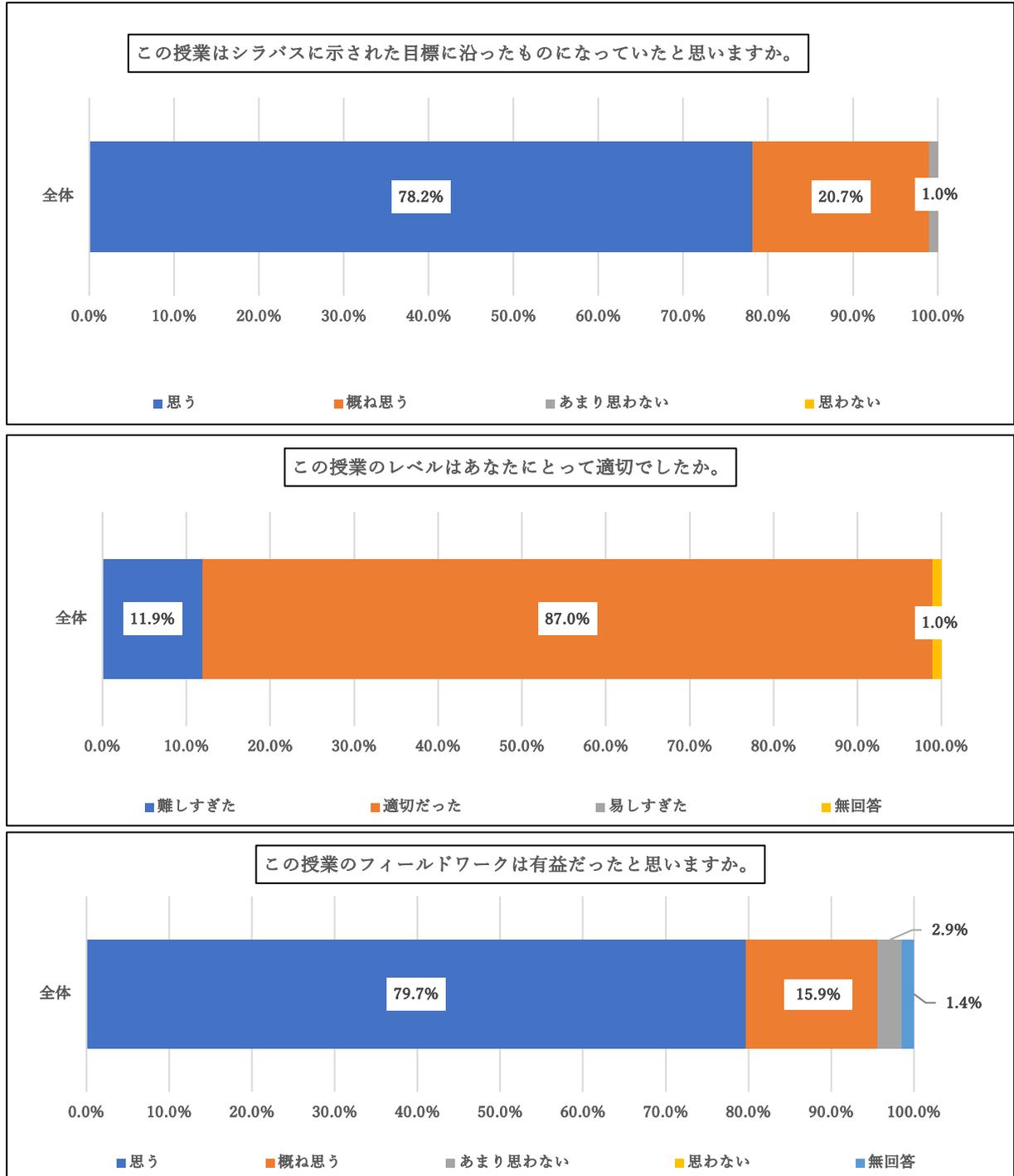
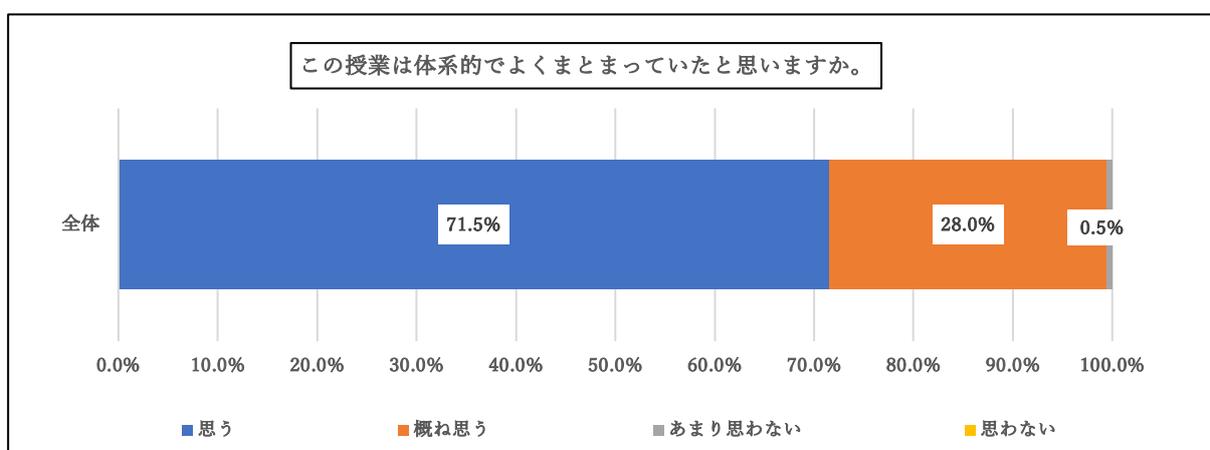
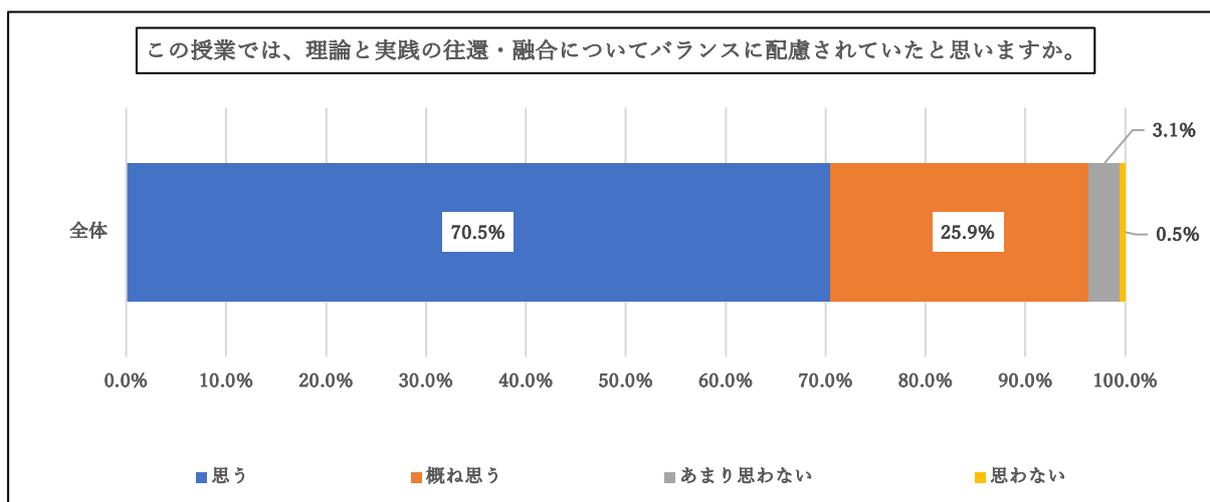


2023 年度秋学期「授業アンケート」

授業アンケートの結果

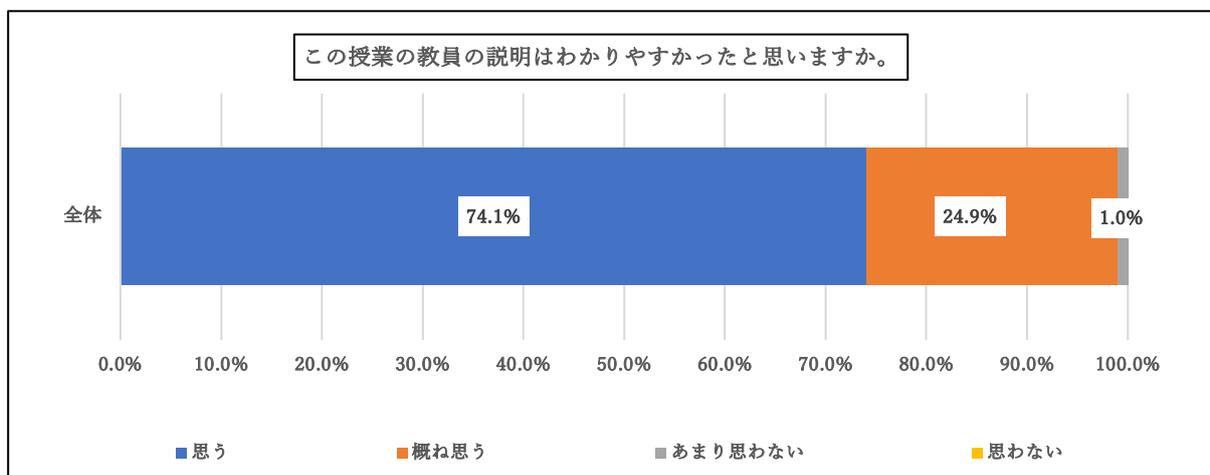
(1) 授業内容について

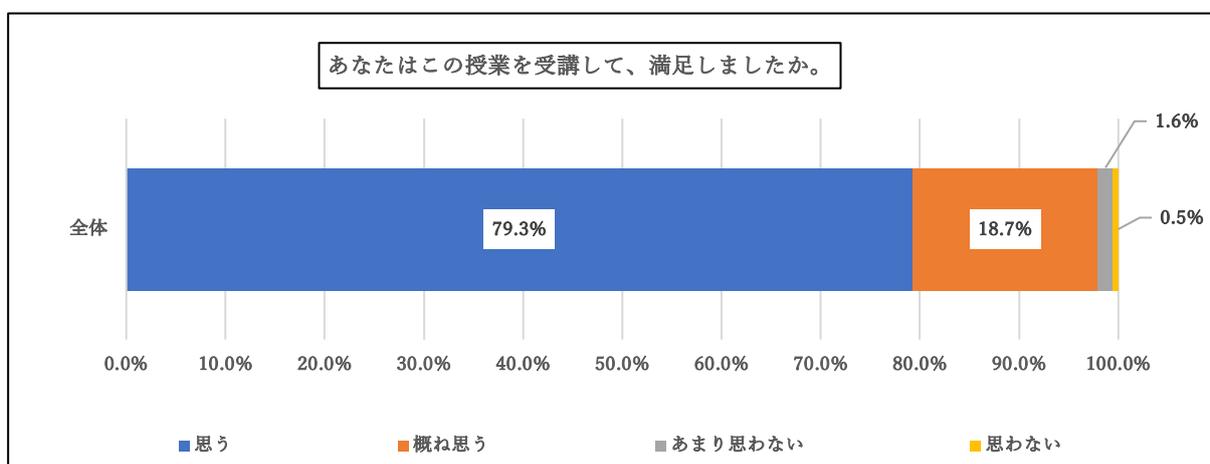
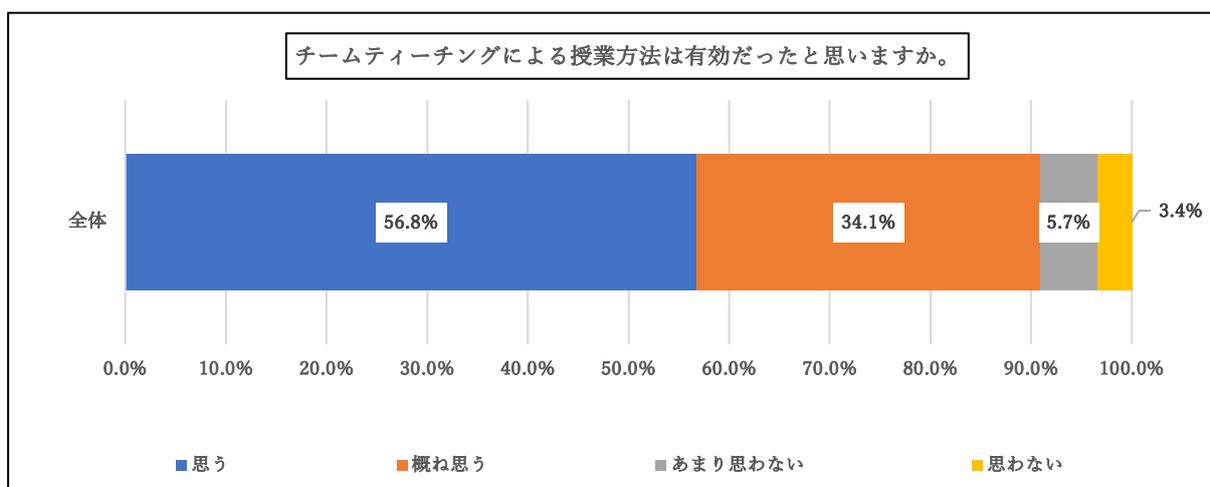
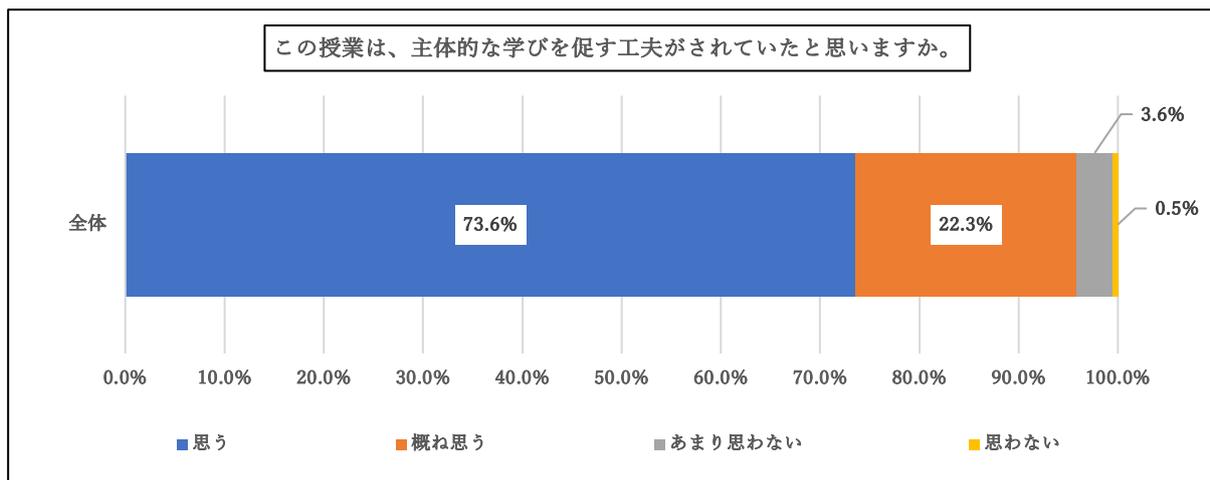




「授業内容について」の上記5項目は、肯定的な回答が9割以上となり、春学期と同様に全体として良好な状態が維持されているとともに、否定的な回答の割合のさらなる縮減が見られた。授業のレベルについては「易しすぎる」との回答は見られず、春学期に比べて「難しすぎる」との回答割合が縮減した。フィールドワークについては、一部の科目において授業内容とのつながりが受講生に理解されにくかったケースも見られたが、全体として例年以上に良好な水準にあると言える。

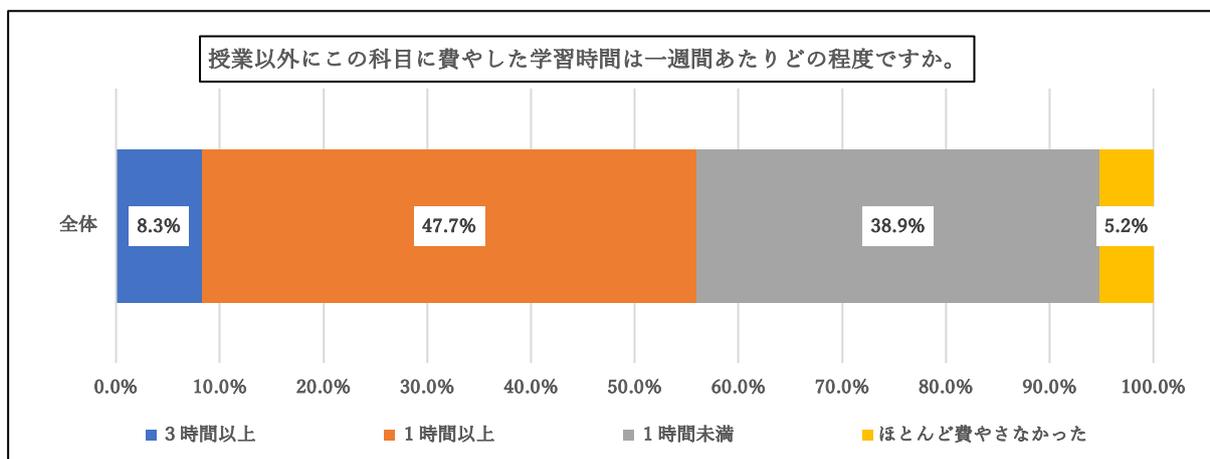
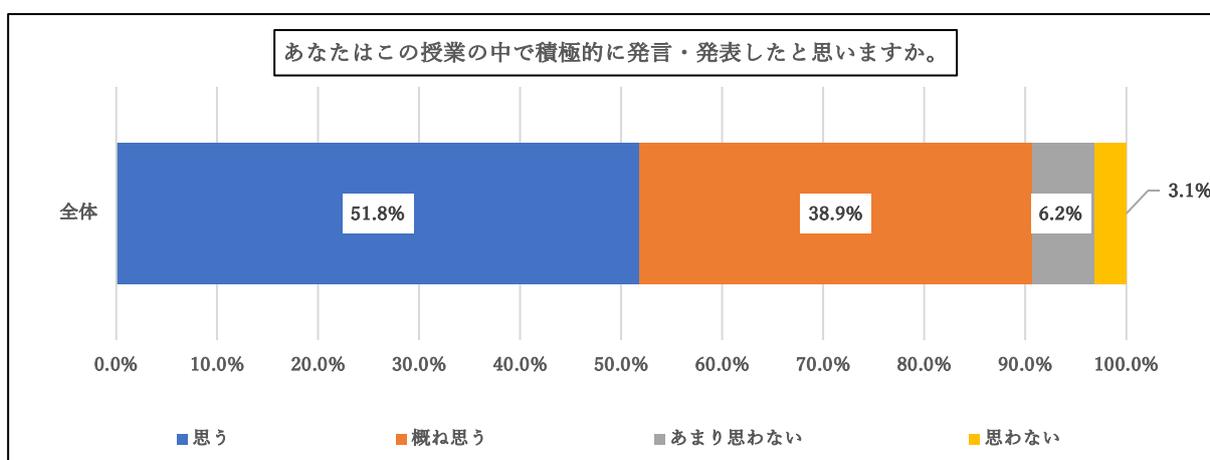
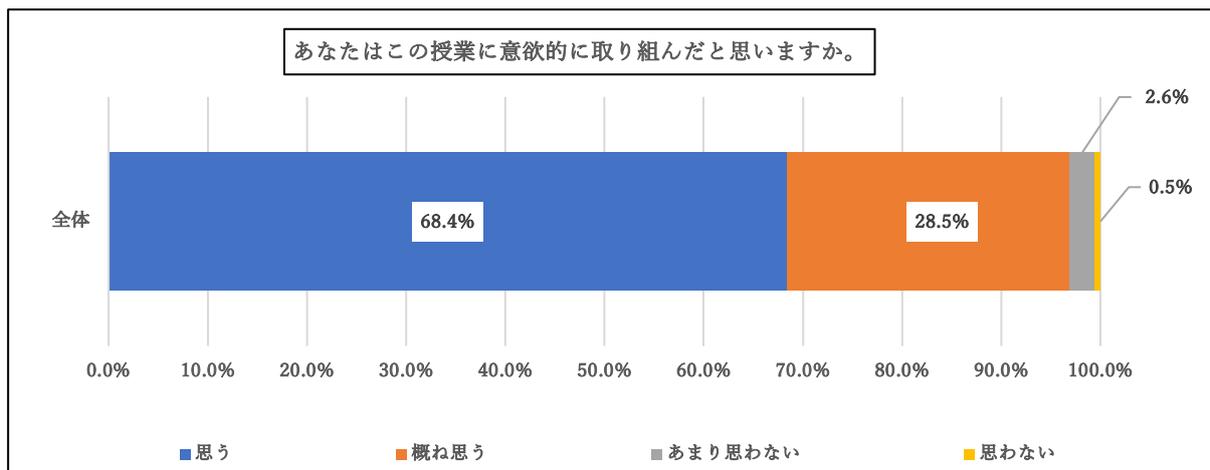
(2) 授業の進め方について

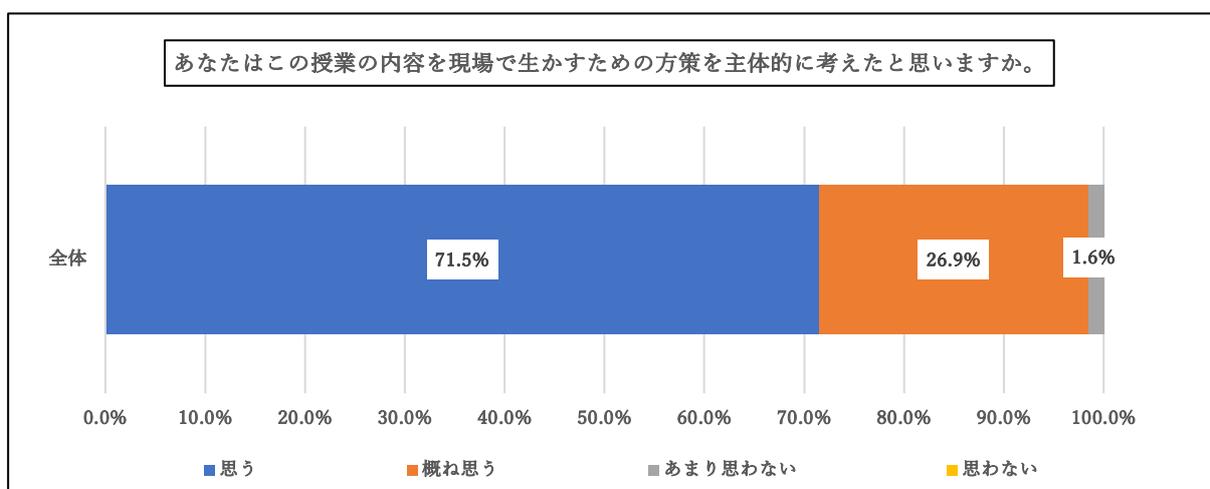
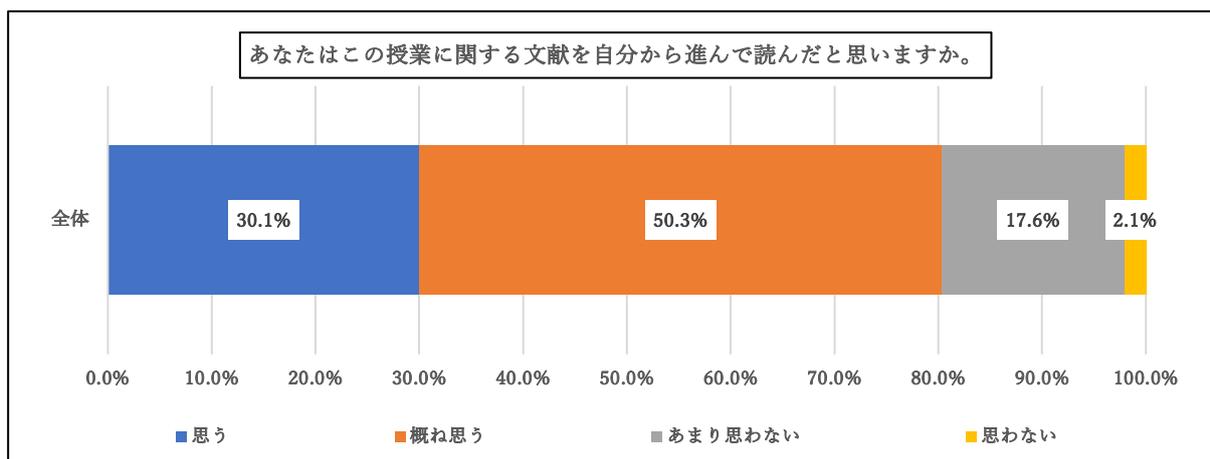




「授業の進め方について」の上記4項目も、肯定的な回答の割合が9割以上の水準にある。ただし、チームティーチングの有効性に関する設問では、否定的回答が1割弱となった（前年度は皆無）。新カリキュラムの実施に伴い、担当教員の組合せも初めての顔ぶれになる科目がある中で、役割分担等のあり方に難しい面もあったと推察され、次年度以降の改善課題として位置づけられる。主体的な学びを促す工夫や授業の満足度については、否定的回答の割合は縮減傾向が続いており、受講生のニーズの個人差への対応を軸にした授業展開の改善・工夫が継続課題と言える。

(3) 受講生の取組について





「受講生の取組について」の上記5項目は、春学期に続いて、授業以外での学習時間及び授業に関連する文献を読むことに関して改善傾向が維持されている。それでもなお、個人差が見られる面については、引き続き受講生のニーズに対応する中で改善を図ることが求められる。なお、他学部・他研究科の科目を含め、院生の履修科目数が増加傾向にあること、また、ストレートマスターが院生講師・非常勤講師として勤務するケースも増加傾向にあるなど、それ自体が意欲的な取り組みである一方、院生生活としては「多忙化」とも言える背景・状況があることにも留意が必要で、授業改善のみならず、研究科全体としての院生支援体制の充実という枠組みからのアプローチも求められる。